

# 看護師がアーティストと二刀流になる話③



熱量を感じ  
カナダで個展だ  
決断

現代アートの中心地、クイーン・ストリート・ウエストにきた  
「ここで人生初の個展を開くぞ。さあ、どうしようかな」と

こんにちは、こんばんは。またはおはようございます。天地成行（てんち・なりゆき）です。みなさんお元気ですか？ 大リーグ・パドレスのダルビッシュ有投手の日本通算200勝。台風一号発生から、いろいろあるこの五月末です。一面は池見陽子さんの人気企画「看護師がアーティストと二刀流になる話」。カナダの地で人生初の個展を開くようになる、そのベールを脱いでまいりました。目が離せない「天界」、いや「展開」に注目ですよ。それから二面は、「みんなつどブログ」の人気記事から、安溪遊地・山口県立大名誉教授と宮本常一先生の名著の増補版をいただいたことで起したS記者との思い出と我が記者人生の失敗談を納めました。

なぜカナダ（トロント）で個展をしたのか、とよく聞かれる。

振り返ると、ずいぶんと無鉄砲なことをしたと思うが、自分なりに一応、考えはあった。まず、大前提として、現在通っている京都芸術大学の卒業研究をするにあたり、個展というものを一度、経験してみたいと思った、ということ。

そこで、どこで個展するかを考えてみたところ、国内よりも海外で行いたい気持ちが芽生えた。私は今まで一度も個展をしたことがないのだから、どこでやっても大変な思いをするに決まっている。

上手くいく可能性もかなり低いだろう。ならば、海外で失敗した方が笑い話になるかな、と腹を決めた。

次に具体的な場所選び。正直に言うところ、本当は芸術の都・フランスのパリで世界デビューしたかった。しかし、当時の情勢不安により断念せざるを得なかった。

そこで、世界のアートシーンの現状を調べてみて、私の目に止まったのがカナダのトロント。

「クイーン・ストリート・ウエストという地域が、現代アートの中心地になっている」という記事を読み、新しいエネルギーを感じた。

その熱い流れを肌で感じたい！  
それが率直な動機である。

とはいえ、いくらカナダで個展をやりたいと思ったところで、できる保証はない。

次回は、どうやってカナダ個展を実現できたのか、について書こうと思う。お楽しみに！

（池見陽子）※随時掲載

池見さんのブログは、<https://note.com/yokocanada>

# みんなつどいブログから

むかし、新聞社の先輩でS君がいました。彼のメアドは「feldnews」という文字を使っていました。文字通り彼は、会社にいる事を拒み続ける現場主義。たまに社内であうと、おもしろい地方のさらに細かい地域の話をかかせてくれました。彼は、数年前に残念ながら若くして亡くなった、と風の噂できました。合掌。同じ会社時代は、よく遊びました。東京・四谷にある上智大学の学園祭に行っ、学生考案の「山手線占い」をして、S君は有楽町駅で私は神田駅だったことを思い出します。また大手銀行の方と呑み会をして、同じ人を好きになり、私が身を引いたりしてみたとか、私が病気になることも会社が変わっても、呑みにいきましよう、と、遠方からきてくれ、「69人の大丈夫ノート」にも、足尾銅山で活躍した田中正造の言葉をすらすら引用し、「最後はわたしもそばにいますよ」と達筆で締められました。



私自身、フィールドでは大変な目に。アポは完璧と飛行機で取材地に赴くも、突如連絡がつきづらくなり、飛行機が怪しい? と思ったら、取材を受けてくれる予定の人は、アポをとった行政の担当者との折り合いがあまりよくなかったらしく、信頼関係が築けない取材になり、話自体が成立せず。とりつくしまもなかった若手の私は「それ、載せたら知らんよ。覚えておきなさい」とすこまれて、没にしてから、結果、それが

発病の決定的トリガーになりました。私はこの取材に對する「なにがしかの侵略者」となって取材対象に迷惑をかけたからこそこの発言だったのであり、「あなたが私の土俵に上がったのだから、あなたがまず私のルールに従いなさい」ということなのかと五〇歳の私は感じる。

例えば、私は「精神疾患」をもってますから、疾患や特性など適当に論評されたら、私だけでなく、精神疾患のあまたの仲間たちに対しても、社会への誤解もなくす為、非常に取材はセンシティブに受けております。はじめての方にはとても厳しく映るでしょう。

私もきちんと経験したということ。だからその時の方の気持ちは今分かります。健康者と障がい者でもある意味「自分や仲間や地域を守らねば」という局面では同じ。マスコミはともすれ、取材対象を丸裸にすることもありますし、きちんとした信頼関係なしに言葉を交わさないのは、隣近所の付き合いだとして同じです。

若い私は、対処や対応方法を知らずにただおびえてしまい、自分の神経の幹が切れた、はじめてのクライシスを迎えました。今考えても、自分が目配り、気配りできなかったお約りがきちんと自分にきただけなんではないかと。痛恨、若すぎた。当時、自分が抱えていた中国人朝鮮族の彼女とのこと、下肢静脈瘤の爆弾が、発現していたこと、また新聞を、作るだけで精一杯だった仕事の頭から書くことへの対応力のなさ……言い訳にしていたらいけません、おさなりな対応をしていました。つもりかきなつて一発で私はくじけたのです。やはり、新聞記者は向いてなかったのでしょう。

というあれこれも、「調査されるという迷惑」フィールドに出る前に読んでおく本、増補版「(宮本常一・安溪遊地、みずのわ出版)を読めば、良好な関係で調査する側される側の思いやりでうまくいくと思えます。これは本当に早く読んでおきたかった一冊です。(四月一〇日付記事「安溪先生からの贈りもの」と思い出した盟友S記者」より、一部編集してます)



てんちくんのやりたい放題のコーナー

ちんちくんの日記  
「マインズメント」  
(不定期)「マインズメント」  
週刊・「マインズメント」

みんなつどい  
第46号

編集長：山本常一